みだれ立つしぶきにぬれて火のごとくわれの
白帆は風に光れり

はたはたと濡帆はためき大つぶのしぶきとび
來て向かむすべなし

かくれたるあらはれにたる赤岩に生物の如く
浪むらがれり

伊豆が崎岩礁多き秋風の海はとろとろうづま
き流る

やと叫ぶ船子等のころに驚けば海面くろみ風
來るなり

とびとびに岩のあらはれ渦まける浪にわが帆
はかたむき走る

荒瀨なす岩礁原をすぎも來て眞帆はぬれつつ
光るなりけり

やうやくに帆に馴れ浪に馴れきたりこころゆ
るめば海は悲しき

泡だてる岬をややに離れくれば沖は凪ぎゐて
雲にかげれり

舳なるちひさき一帆裂くばかり風をはらみて
浪を縫ふなり

船子たちの若きはねむり老いたるは風のはな
しをわれに聞かする

あはれこは潜水夫の舟にありにけり泡立つ沖
の浪に舟居り

しらしらと浪の穂がしらみだれたる沖邊に機
械つかふ潜水夫等

ほうほうと聲を合せつ空氣を送る舟のうへな
る潜水夫等の妻

空氣送る潜水夫の舟の機械の音疾風の海にた
えずひびけり

海底に三時四時をすごしつつあさらふ貝を買
はましものを

海蟲のやや大きなるかたちして潜水夫は浪に
あらはれにけり

潜水夫いま舟に手を寄せ舟の中の妻等あらそ
ひ抱きあげむとす

笛の如わが小さき帆のなりはためき沖をはせ
つつ潜水夫を見たり

みだれ吹く風にうかべる落葉ともさびしく舟
を見てすぎにけり

ある時はうねりにかくれ或時はうねりの嶺に
叫ぶその舟

風の海むら立つ浪にかくれつつ聲のみぞする
潜水夫等の舟

しばらくも搖れのやまざる沖にしてをんなの
聲をきくは悲しき

遠ざかる潜水夫の舟をさびしみてわが帆をみ
ればぬれてゐにけり

飛沫ちりわが帆のなかばぬれたるに雲を漏れ
つつ日の射しにけり

いろ赤くあらはれやがて浪に消ゆる沖邊の岩
を見てはしるなり

その島にただ燈臺立てり、看守K—君はわが
舊き友なり

友が守る燈臺はあはれわだ中の蟹めく岩に白
く立ち居り

おほいなる岩のいただき黑蟻と見えつつ友は
ものを振りをり

われも突立ち答へをせむとひしめけど舟搖れ
にゆれ這ひて布振る

やと叫ぶ聲かも姿目には見えいまだまつたく
きこえざるなり

切りたてる赤岩崖のいただきに友は望遠鏡を
振りてゐにけり

友がよぶ赤き斷崖見あげつつ舟をつけむと浪
とあらそふ

岩赤く崖もひとしほ濁血の赤かる島の友が燈
臺

岩赤きその島にしも近づけば浪はいよいよ荒
れて狂へり

赤岩の十丈にあまるきりぎしを這ひつつやや
に友の下り來る

むらだてる赤き岩々飛びこえて走せ寄る友に
先づ胸せまる

赤き斷崖くづれて入江めきたるに舟子等帆お
ろし舟漕ぎ入るる

碎け立つ浪のすきまに沙魚のごと眞赤き岩に
とびうつりけり

顏も蒼み人に餓ゑたる饑心地火の如き手をと
り合ひにけり

あはれ淋しく顔もなりしか先つ日の友にあら
ぬはもとよりなれども
別れゐしながき時間も見ゆるごとさびしく友
の顔に見入りぬ
たづさへし我がおくりもの秋の園のダリアの
束はまだ枯れずあり
ダリアの花につぎつつ舟子等とりいだす重き
は友よ酒ぞこぼすな
歩みかね我が下駄ぬげばいそいそと友は草履
をわれにはかする

友よまづ吾の言葉のすくなきをとがむな心何
かさびしきに
うつつともなく浪にもまれし身をはこぶ赤き
きりぎしの岩の階段
相逢ひて言葉すくなき友どちの二人ならびて
登る斷崖
見かへれば舟子等いづれも面あかめ舟流さじ
と叫び狂へり
石づくり角なる部屋にただひとつ窓あり友と
妻とすまへる

その窓にわがたづさへし花を活け客をよろこ
ぶ若きその妻

語らむにあまり久しく別れゐし我等なりけり
先づ酒酌まむ

友醉はず我まだ醉はずいとまなくさかづきか
はしこころを溫(あたた)む

石室(いはむろ)のちひさき窓にあまり濃く畫のあを空う
つりたるかな

過ぎ去りし彼が昨日も眼のまへに石と靜けき
そが顏も見ゆ

石室(いはむろ)のしづけかればかもの馴れぬところなれ
ばか泪し下(くだ)る

夜の歌

ただひとり淵にのぞめる心地しつ椅子に埋れて酒をまつなり

夕かけて風吹きいでぬ食卓の玻璃の冷酒の上のダーリア

盲目にて目とぢて今宵ひとりにて飲みてあらむと椅子に埋るる

わが目いま魚の如くに細くなりつめたくなりて夜に入るなり

厭はしきにたへむとするはあだなりとささやく酒は月いろにして

われとわが惱める魂の黒髪を撫づるとごとく酒を飲むなり

金屬の匂ひしにつつ背の方の燈火いたく更けしづみけり

我がまなこちりのくもりも帶びぬ夜にものの
うつるはあはれなるかな

見むとする甲斐なきわざを今日もしてひとみ
こらすが悲しかりけり

テーブルの白布の上にはらはらと夜の白雪ち
ると思へり

更けたりな雪しとしとと降るごとく電燈(ともしび)はわ
れをつつみぬにけり

酒は火と燃え心の底に埋れ居りあやしき髪の
冷えにもあるかな

村時雨廣葉ぬらして過ぎにけり醉はぬわが身
に夜はさびしき

ひとり去り二人去りつつ夜の部屋われのみひ
とり飲めるなりけり

みな去れ冷たき部屋となして去れ夜の椅子に
われのひとり飲めるに

手に額に酒のあぶらの浸(にじ)みつつ夜はつめたく
なりまさるなり

動かじな動けば心散るものを椅子よダリアよ
動かずもあれ

をりをりにものの葉などのちるごとく灯かげ
にうかび女動けり

醉ひしれて見つむる夜の壁の上に怪鳥あまた
とべる畫のあり

熟れ熟れて果實(このみ)あやふく散るごとく醉は身うちに破れむとする

風わたる戸の面(も)の庭木見やるさへいとはしくして酒を飲むなり

ただひとり最も隅の椅子に凭りダリアを前に寄せて飲めるも

灯を強みダリアがつくるあざやけきかげに匂へるわれの飲料(のみもの)

肉叉(フォーク)の柄わづか觸(さは)れば散りてけり夜の机の黒きダーリア

はなびらに宿る夜ふけのともしびにダリアは女の肌の如しも

眼にも頰にも醉あらはれぬ夜なるかな黒きダリアの陰に飲みつつ

夜の机われのにほひを嗅ぐごとく黒きダリアを手にとりてみる

つめたきは湧きし血しほかひいやりと灯(ともしび)のかげに身ぶるひをする

荒(すさ)みたる心見つめて飲みて居ぬ紅きダリアも眼にうとましく

或時はわがけがれたる血の色の塗られし如く
夜の花を見る
ダリアよ灯消さば汝が色も濃きあぶらなし闇
となるらむ

さびしき周圍

わくら葉の青きが庭に散りてあり朝はひとみ
のわびしいかなや
くされたる果實に似る悔心地舌にのこるに眼
をとぢにけり
われと身に唾する如くあぢ氣なく悔いつつ冬
の朝日にあたれり
向日葵のおほいなる花のそちこちの瓣ぞ朽ち
ゆく魂のごとくに

死せる鳥むれつつ空やわたるらむわが日はけ
ふもさびしう明くるる
思ふままにふるまひてさてなりゆきを見むと
思ふに心冷たし
言葉とわれとはなれ離れにあるごとき冷たき
時にいつ逢はるべき
死を思ひたのしむは早や秋の葉の甲斐なきご
とく甲斐なかりけり
大河の音なく海に入るごとく明日にいそがむ
こころともがな

青き幹かの枝を切れかの葉を裂け眞はだかに
して冬に入らしめ
われならぬ人居りてけふもわがごとくわびし
きことをして居たりけり
わがひとみわれのまなぶたこのゆふべつちに
もまして冷えて動かず
時として市街のいらかもゆく人も黄なる落葉
と見ゆることあり
とりとめて何も思はぬ時多し葉の散る如きわ
が身なるらむ

ふかきよりうかびいでつつ心ややあらはにな
りて悲しみてゐる

えんとつに煙わきならび市街みな磧の如し心
のごとし

こよひまた眠られぬ身に凍みひびく冬の夜雨
は神のごとしも

夜の市街もわが身もしとど凍みとほり氷れと
ごとく時雨ふるなり

髪の毛のひとつひとつがよごれゆく如きさび
しさ身を去りかねつ

静かなる時來よと思ふひややかにわが目わが
身にあれかしと思ふ

時わかず心冴ゆればわれと身のおきどころな
くさびしかりけり

あはれこは醜くも市街をゆくものか思ひあま
りてせんすべもなく

電車よりとびおりするな死にやせむこのごろ
のごとうつつなければ

さびしさの凍れるかたへ妻も子も老いたる母
も動きゐるなり

わが如きさびしきものに仕へつつ炊ぎ水くみ
笑むことを知らず
妻や子をかなしむ心われと身をかなしむここ
ろ二つながら燃ゆ
あはれ身は生きものなればこの如く移らふこ
ころとどめかねつも
照りくもり空のをちこちゆきちがふ冬雲の群
を窓にいとへり
酒飲まむ酒飲まむ今しきはまりてわがさびし
さの凍らむとするに

いまぞわれ氷の上に眞裸體にねてゐむほどに
滿ち足りにけり
けふもまたよしなき人を訪ひてけりよしなき
ことを語り來にけり
この賤しき友の心をうとんずとあやふくも我
の動きけるかな
いづれもみな心にあらぬことをのみ言ひてつ
どへり、集へり、雪の夜
天つ日の匂ひしづかに身にもしみあはれしば
しは眠れこころよ

吹きすぎし風のたえまにほつとりと日の匂ひ
こそ身によどみたれ

冬なれば散る葉もあらずこの木立稀(まれ)にし來れ
ば涙おつるも

涙たれ落葉が上によこたはるわれの醜きつか
れざまかな

ことさらに鳥も啼くがに思はれて落葉木立を
立ちいでにけり

たましひのけぶるといふはあまりにも淋しか
らずや戀となれかし

身に燃ゆるは新しき戀あるはまた埋れゐし夢
かにかくにもゆ

こころさへ身さへ落葉のいろもなくさびはて
ていま燃ゆるこの戀

冬空のあまり乾けば市人(いちびと)もひそかに雪をまつ
にあらずや

地を踏めど地にいらへなく心のみくくとひび
きて人の戀しき

雪積みて今宵はいとどしづけきに夜半にねざ
めよ人を思はむ

雪どけの軒のしづくにいざなはれ友見まほしく家を出にけり

雪照るや思ひぞいづる郊外のかのひとり者ながく訪ひ來ぬ

片幹にこほれる雪のけぶりつつ入日の中に立てり欅は

われと身の肌のぬくみをなつかしみ梢より散る雪ながめ居り

枯木立木木より雪の散りやまず行きずりの身に西日赤しも

身に添ふは雪のにほひかわがはだの匂ひか西日せちに赤けれ

おのづから悲しき聲にいでてなく雪の日の鳥西日にきこゆ

雪ふかき落葉の木の間入日さしあまりてここの窓を染むるも

わがそばに火ありて水を煮るを得べし玻璃のうつはに水も滿ちたり

火をたたじ沸湯(にえゆ)たたじとつとめつつさびしさに或夜起きてゐにけり

なすべきをなさざる故にこの如くさびしきも
のとなりしやわれは
消すまじと心あつめて埋火にむかへる夜半を
雪凍るらむ
ペン一つまへにあるさへひしひしと身にくひ
入りてさびしき夜なり
工場街折しも西日眞赤きに煙地に垂れわがひ
とりゆく
工場街とほく歩める少女子のながき羽織に夕
日ゆらめけり

ただひとつちさくまじれる教會は扉さしてあ
りき工場街ゆけば
西日赤き街路の辻にひと等うち默し血みどれ
の犬咬み合ひて居り
春來ぬとこころそぞろにときめくをかなしみ
て野にいでて來しかな
この歩み止めなばわれの寂寥の裂けて眞赤き
血や流るらむ
われと身を嚙むが如くにひしひしと春のさび
しき土ふみ歩む

青草の岡にいであひこらへかねぬ泣ける涙のあ
とのさびしさ

春の雲照りつつ四方をとざせる日高きに立て
ばわが世悲しも

鶯の啼きてゐにけり久しくも忘れゐし鳥なき
てゐにけり

ふと見れば路傍の軒にほこりあび籠にし鳥は
啼けるなりけり

さび色のあをき小鳥はあやしげにわれを見つ
めてやがてまた啼く

つかれはてすわれる岡のもとをすぎ春あさき
日の小川流るる

おほぞらに垂れつつ春の雲光りここの林に鴉
むれ騒ぐ

砂

丘

自序

本集には『秋風の歌』以後、即ち昨年の春から今日までの作を集めた。ただ卷末「ふるさと」の一章のみは一昨々年から一昨年の春にかけ鄕里滯在中及び上京の途中に詠んだものを『みなかみ』に編入すべきであつたのを誤つて今まで落してゐたものである。「曇日」は東京小石川寓居中、その他は當地移轉後の作である。

今までは常に舊く詠んだものを卷首に置いて順次新作に及ぶ編輯法をとつてゐたが、今度はその反對に新作を初めに置いた。

一歌集を編むごとに何かしらものを思はせられるのは常であるが、今はそれを筆にするのも煩はしいほど靜かな氣もちになつてゐる。このままで今少し澄み入つた作歌の三

味境に進みたいものである。

大正四年九月十四日　三浦半島海濱にて

著者

山の雲

下野より信濃へ越え蓼科山麓の春日溫泉に遊ぶ、歌四十五首

朝空に黄雲たなびき蜩のいそぎて鳴けば夏日かなしも

朝霧は空にのぼりてたなびきつ眞青き峽(はざま)間ひとりこそ行け

少女子がねくたれ帶か朝雲のほそほそとして峰にかかれり

蜩なき杜鵑(ほとときす)なき夕山の木がくれ行けばそよぐ
葉もなし

わがこころ青みゆくかも夕山の木の間ひぐら
し聲斷たなくに

岨路(そはみち)のきはまりぬれば赤ら松峰越(をと)しの風にう
ちなびきつつ

空高み月のほとりのしら鷺のうき雲の影いま
だ散らなく

雨待てる信濃の國の四方(よも)の峰(みね)のゆふべゆふべ
を黄雲たなびく

山深く鳥多し、燕の歌

あはれこは風の渦かもつばくらめ峽間(はざま)の空に
まひつどひたる

有明の月かげ白みゆくなべに數まさりつつと
ぶ山燕

尾長

尾長鳥その尾はながく羽根ちさく眞白く畫を
とべるなりけり

尾長鳥石磨るごとき音には啼き山風強みとび
あへぬかも

杜鵑

朝雲ぞけむりには似るこの朝けあわただしく
も啼くほととぎす
ほととぎすしきりに啼きて空青しこころ冷え
たる眞晝なるかな

鷹

老松の風にまぎれず啼く鷹の聲かなしけれ風
白き峰に
なか空にまひすましつつ啼く聞けば天雲も光
り輝くとこそ
今日はしも峰越しの風の強ければうす雲も鷹
も光り流るる
雲がくれひひろと啼きて行きし鳥峽間の空は
光りたるかな
かならず二羽ゐる鳥と仰ぎゐしにあはれ峰越
しにまひ寄りにけり

鶺鴒

鶺鴒しろがねの銭かぞへゆく冷たき聲に啼く
眞晝かな

いしたたきちさきめうとの頰を寄せて啼くよ
淺瀨の白石のうへに

いしたたきやまずしもなくさびしさにわが日
の晝も更けにけるかな

いしたたきちちと飛びかひ啼く久し眞白川原
の瀨を淺みかも

木々の影はだらに黑き川隈に、啼きつつ去らぬ
二羽いしたたき

二羽とのみ思ひしものをいしたたきまたも來
啼けり晝深みつつ

その他

秋の鳥百舌鳥ぞ來啼ける夏山のこの山かぜの
眞白きなかに

ほととぎす樫鳥ひよ鳥なきやまぬ峽間の晝の
郭公のこゑ

何鳥か雛をそだつるふくみ聲今朝も老樹の風に聞ゆる

窓邊遠望

うすものの白きを透きて紅ゐの裳の紐ぞ見ゆこち向くなゆめ

ふくよかに肥えも肥えつれ人怖ぢず眞向ふ乳のそのつぶら乳

丈長に濡髪垂らし晝の湯屋出でて眞裸躰つと走りたれ

秋近し

峰のうへに卷き立てる雲のくれなゐの褪せゆくなべに秋の風吹く

みねの風けふは澤邊に落ちて吹く廣葉がくれの葛の白花

獨居

うららかに獨りし居れどうら寒きこころをり起りこそすれ

向つ峰にけふもしらじら雲い立ち照り輝くに
獨り居にけり

輝けば山もかがやき家も照り夏眞白雲わびし
かりけり

麓邊の路のひとすぢしらじらと見えて向つ峰
雲わきやまず

相模なるその長濱の白濱に出でてか今日も獨
り浪見む

相模なる妻が許へ送れる歌

向つ峰に眞晝白雲わくなべに汝が黑髪おもほ
ゆるかも

愁ふる時閉ぢゆく癖のその眸を思ひ痛みて立
ちてゐにけり

眞白なるふとりじしなる双かひなむなしく床
にありかわぶらむ

われ獨りわが身清しみ眼も瘦せつ岨路朝ゆき
夕ゆきにつつ

きはまりて戀しき時は三日にしてすへる煙草
をひと夜には吸ふ

夜のほどに雨過ぎけらし五百重山今朝みづみづし戀しきぞ君

今もかも身か光りなむ眞晝憂し峰にはかかれ天の雲むら

七月中旬下野なる背山君を訪ねむと思ひ立つ

のちいつか逢ふべきものとたのみつるその時し終に來りけるかも

下野の奈須野が原のなつ草のなかにし君を見む日近づく

友と相酌む歌

飽かずしも酌めるものかなみじか夜を眠ることすらなほ惜みつつ

盃をおかば語らむ言の葉もともにつきなむごとく悲しく

一しづく啜りては心をどりつつ二つ三つとは重ねけるかも

幾日かけ幾月かけてねがひつる今宵の酒ぞいざや酌みてな

死ぬごとくこころかわける時にして君と相見
きうとんずなゆめ

朝は朝晝は晝とて相酌みつ離れがたくもなり
にけるかな

時をおき老樹の雫おつるごと靜けき酒は朝に
こそあれ

那珂川に生けるうろくづ悉くくらへとわれに
强ひし君かも

或夜うち連れて川狩に行く

うばたまの夜の川瀨のかちわたり足に觸りし
は何の魚ぞも

松明をさしかがやかしわが渡る早瀨の小魚雨
降るごとし

別離

別れ來しけふの汽車路は夏雲の湧き立つ野邊
のなかにしありけり

別後友が妻へ贈れる

若竹の伸びゆく夏のしののめのすがすがしさ

に君はおはしき

逢ひしとき姉のごとくも思はれき別れて後ぞ

なほ思はるる

三浦半島

病妻を伴ひ三浦半島の海岸に移住す、三月中旬の事なりき

海越えて鋸山はかすめども此處の長濱浪立ち

やまず

ひとすぢに白き邊(へ)浪(なみ)ぞ眼には見ゆみ空も沖も

霞みたるかな

春眞晝沈み光れる大わだの邊(へ)に立つ浪は眞白

なるかな

うつうつと霞める空に雲のゐてひとところ白く光りたるかな

春深し

田尻なる雜木が原の山ざくらひともと白く散りゐたりけり

永日

地あをく光り入りたる眞晝の家菜の花はわれに匂ひ來るかも

棕梠の葉の菜の花の麥のゆれ光り搖れひかり永きひと日なりけり

妻の病久し

晝の井戸髮を洗ふと葉椿のかげのかまどに赤き火を焚く

かたはらに晝の焚火の燃えしきりあをじろき汝がはだへなるかな

吾子旅人

晝深み庭は光りつ吾子ひとり眞裸體にして鷄
追ひ遊ぶ
尺あまり二尺に足らぬ子がたけの悲しくし見
ゆ濱の浪の前に

或朝

近づけば雨の來るとふ安房が崎今朝藍深く近
づきにけり
この汐風いたくし吹けばふしぶしのゆるみ痛
みて沖あをく曇る

晝の濱

晝の濱思ひほうけしまろび寢にづんと響きて
白浪あがる
走れ走れと身うち波うつ息づかひとどめかね
つつ晝の濱走る

夏立つ

夏立つや四方の岬のうす青みあはれ入海荒れ
がちにして

夏日哀愁

夏の朝ややに更けゆきわがこころ離ればなれに疲れたるかな

夏草の花のくれなゐなにとなくうとみながらに挿しにけるかな

うす藍のいまは褪せなむあぢさゐの花をまたなくおもふ夕暮

あぢさゐやこよひはなにか淋しきに立ち出でて雨をあふぐ夜の庭

家のうち机のうへの紫陽花のうすら青みのつのる眞晝日

わだつみの荒磯の貝をとり來り殼碎きつつさびし晝空

潮ぐもりこの貝あまり新しく磯くさくして食べがたきかな

微恙

縞ほそき紺の素袷身につけて晝の戸繰れば夏がすみせり

夜の海

傘さして見れば沖津邊夏の夜の紺の潮騒うかびたるかな

ものうさに幾日か見ずて過ぎにけむこよひ眞闇の海ぞさびしき

しみじみと朝空あふぎ立ちつくす夏の眞土の冷たきうへに

いまはただ土の匂ひもありがたくたたずみてこそありね朝庭

柿の葉の青きもわれのさびしきもひたすらにして露もこぼれず

柿の葉のこもりてしめる庭のつち朝はわが身も伸ぶ心地すれ

夏深し

黒がねの鋸山に居る雲の晝深くして立ちあへなくに

眞晝

いはけなき涙ぞ流る燕啼きうす青みつつ晝更くるなかに

しばらくはうつつともなく眞がなしき夏のま晝のわれにしありけり

朝霧

入りつ海朝霧ながるをちこちの岬に夏の日はさしながら

横さまに霧は降りつつ黍青しけふも火のごと晴るるにかあらむ

わびしさや玉蜀黍畑の朝霧に立ちつくし居れば吾子呼ぶ聲す

鴉

凶鳥の鴉群れ啼きこもりゐの窓の晝空けぶりたるかな

日のひかり紫じみて見ゆまでに空にとびかひ啼くむら鴉

蛇もいま地にひそめる日なかどき眞黑がらすのやまずしも啼く

早苗田のうへをめぐりて啼く鴉早苗萎ゆかに
啼くむら鴉

釣魚

詮なしや晝の庭木の下くぐり釣りに出でゆく
わがこころから

燕啼く眞晝大野の日の眞下つり竿かたげ行け
ば遠きかな

麥畑の熟れし片すみ野いばらのかげの小川に
けふも來にけり

曇日

植物園

春あさきみ空けぶりて午前の植物園にひと多
からず

朝日さすかの溫室のガラス戸のすこしあきた
り春淺みかも

木がくれのあを葉がちなる白椿繪かきがひと
り描いてゐるなり

かのをとこ立ちてゐがけば紺ふかき背廣に春
日ゆれてやまずも

常盤樹の蔭にしあればひそひそと地も匂ひて
椿描くなり

ひややかに朝風ぞ吹く白つばき咲きは匂へど
葉がくれにして

遠つ空ひかりてけぶる春の日の植物園をひと
り歩むも

ひややかに光りつれたる青樫のこずゑのみ空
けぶりたるかな

鵯鳥のけたたましくも啼くものか樫の木立の
あをき春日に

かたすみの杉の木立のうす赤み枯草原にたん
ぽぽの萌ゆ

植物園のかれくさ原に居る鵯をりをり動き遠
くとばなく

ただひともとたんぽぽ咲けるそばに來てかの
黒き犬は坐りけるかな

ウヰスキイひそかに持ちて來べかりし春あさ
きこの枯草のはら

樹や病める

とある幹に玻璃の管さし水をとる黒服のをとこ居りにけるかな

大いなる樹の根にあれば黒服の若人(わかうど)いとどさびしくぞ見ゆ

妻の病久し

病める子がとぢたるこころしばしだにひらくとはせよ淡雪のふる

ひとすぢに降りも入りたるしら雪のかすけき聲のあはれなるかな

梅咲く

年ごとにする驚きよさびしさよ梅の初花をけふ見出でたり

梅咲けばわが昨(きそ)の日もけふの日もなべてさびしく見えわたるかな

風を愛する癖あり

耐へがたき生心さへ身には燃え夜のくだちゆき風吹きやまず

こらへかね寢床いづれば頰はあつく染りゐにけり風吹きやまず

戸出づれば家のめぐりの落葉樹に光りて夜風吹きゐたりけり

音羽護國寺

むら立ちの異木に行かず山雀は松の梢にひもすがら啼く

この寺の森に寄る鳥とりわけて山雀のなくはあはれなりけり

母を憶ふ歌

とある日の朝のさびしきこころより冬の野に出でて君戀ふるかな

子のこころ或ひは親のむきむきに戀しとはいへどいまは燃えぬかも

あは雪を手にもてるごときあやふさを老いませば君につねに覺ゆる

あはれ再び逢ひがたき日の二人の上に今は近
しとおもへど甲斐なし

呪(のろ)ふべきそむきがちなる子のこころ老いたる
親のその錆心(さびどころ)

今は早やあきらめてかもおはすらめ老いたる
人のみなするごとく

落葉樹の根がたのつちにうづくまり君おもひ
居れば匂ふ冬の陽

二月末

みなかみの山うすがすみ多摩川の淺瀨に鮎子(あゆこ)
まだのぼり來ず

花屋

水仙のたばにかくれてありにけりわが見出で
たる白椿花

打群れて酒酌みたき人かずかずあり

笑顔(がほ)泣顔さらぬげにただ見合ひつつ夜明けて
もなほ酌まむとすらむ

この頃の山蘭君へ

萩のはな上枝に見えてそよ風のながめさびしきころにもあるかな

やや寒し

甲斐が根に雪來にけらしむらさめのいまは晴れてなうち出でて見む

朝の窓

秋の朝の酒場のつめたさひとびとのつかれたる顔默し動かず

なかの一人の老いたる顔にうす赤みさすよと見れば眠るなりけり

萎えたるわれのはだへにしみじみと秋の朝日のさして居るなり

さびしさや酒場の小窓にこぼれたる秋の朝日を酌みも取らうよ

秋の朝酒場の鏡に見入りたるわれのひとみの靜かなるかな

秋漸く晩し

崖のつちほろろ散る日の秋晴に漆紅葉(うるしもみぢ)のさび
しくも燃ゆ
浮雲にとりどり影のうまれつつ眞晝の空は傾
かむとす
あまりにもこころ渇くにたへかねてとりし煙
草よ風白き畑

獨り

いたましくめづらしきものを見るごとくわが
腕をそと撫でてみにけり
秋の夜のほのつめたさにいざなはれ友戀しさ
は火のごとく燃ゆ
しのびかね友をたづねに出でてゆくこのすが
た友よあはれとおもへ

獨居

ひとを厭(い)ふとにはあらねどわがこころひそみ
ひそみて歩むとすらし

こころの端にかたみに觸れじふれじとてあらぬ事をば語りゐしかな

野分

消えみ消えずみはるけき空にうす雲のうちもたなびき朝野分する

秋の風今朝は吹くぞと聞あけてまだ覺めぬひとをかへりみるかな

わがこころあるにあられず大風のしどろの朝を出でて歩めり

うす青みをんなの膚のかなしくも耐ふるに似たり風のなかの樹

風を强み幹のあをみのいとどしくその根のつちは搖れてやまなく

平野

再びは斯く晴るる日もあるまじと惜みつつ日ごと野に出づるかな

大空はかすかにうごき動きをりあふむけに草に、ねれば冷たく

大野邊の秋の日ざしをやや強み寄れる木かげは白樫にして

くろぐろと汽車こそ走れ秋の日のその長き汽車のあとに立つ風

野ずゑゆく汽車のかげのみはるかにて秋の日いまだ暮れずあるかな

秋晝

誰も見じとひとり眞はだかほしいまま秋のま晝を化粧(けはひ)す、をんな

秋立つ

秋といひわれから聲に驚きて窓邊にとほき市(まち)見やるかな

野にひとり

わが膚に夕日しみ入りしみ入るやさびしさはただ涙となるに

夕日さしきりぎりすなきこほろぎなき百舌鳥(もず)もいつしか啼きそめにけり

晩夏郊外

つら並めつものを覗ひ蛙群れをり夏も終りの
沼のくろつち
ひとしきり蛙さわぎて靜まればこほろぎはつ
ちになきいでにけり
夏ぞらのくゆりさびしみ見つつあれば雲か風
かも湧きそめにけり

若人の群

身のめぐりいづれさびしき人ならぬなきに怖
れて狂ひて遊ぶ
さわやかに高くも雲のかよふかな窓の木梢に
寄る風もなく
木犀の匂ふべき日となりにけりをちこち友の
住みわびし世に
大空に照りつつ渡るうき雲も身にしむとさへ
さびしきものを
さびしさはあけはなちたる秋の窓にひしと流
れ來とほき常盤樹

夏の月

いや冴えに月の冴ゆるにうちしなえさびしき
ものとなりにけるかな
かかりせば妻をともなひ來べかりしこよひの
野邊の月のいろかな
窓の邊の木ぬれのあを葉かき垂れてほこりぞ
見ゆる夏の夜の月

瞑目

曇りはてしはるけき空の底ひより雨はやうや
く降りそめしかな

朝寂し

眼ざむるやさやかにそれとわきがたきゆめに
疲れし夏のしののめ

あけくれ

貧しさに妻のこころのおのづから險しくなる
を見て居るこころ

貧しさに怒れる妻を見るに耐へかね出づれば
街は春曇せり

われと身のさびしきときに眺めやる春の銀座
の大通りかな

われと心を勵ませど

はした女もあはれむごときひとみして或時の
われを見るにあらずや

思ひ届しかへり來ぬれば部屋にひとり吾子あ
そびゐき涙ながるる

夏日哀愁

土ぼこりにまみれ疲れて風の畑の木かげに入
れば居たり青蛇

魚群るるにほひか青葉風に裂けつつ幹にひえ
びえ蛇這ひてをり

そこ此處とつちの燃ゆるにかなしみて蛇はも
幹によぢ登りけめ

つばくらめ地に燻りてとびみだれ風に光れる
樹に蛇は這ひ

しみらしみらにわれの疲労(つかれ)の匂ひ出で汗もか
わくに行かぬ青蛇

蛇は早やあを葉がくれのわれの目を見いでて
細く身を曲げむとす

ひと嚙まぬうすいろの蛇風の日のしなえし幹
をはひ上る這ひ上る

夏冷し

みづからのいのちともなきあだし身に夏の青
き葉きらめき光る

水無月(みなつき)の朝ぞら晴れてそよ風ふきゆらぐ木の
葉に秋かと驚く

初めて飛行機を見る

春の雲空かきうづめ光れる日飛行機ひとつか
けりゆく見ゆ

プロペラのひびきにまじり聞え居り春の眞晝
の吾子(あこ)が泣きごゑ

いとかすけく春の青樹のこずゑ搖れ飛行機は
雲に消えゆきにけり

飛行機を見送りはてて立ちあがる身に寂しさの滿ちてゐにけり

朝の歌

自序

本卷は昨年初秋出版した歌集『砂丘』に次ぐものである。即ち大正四年九月頃より同五年四月までの詠草を輯めた。

秋の頃より本年二月前後まで、何か今までと異つた新しい昂奮を覺えて詠み耽つてゐたのであつたが、やがて東北地方の旅に出るやうになつて途絶した。その昂奮時代の作は尙ほ粗野たるを免れないが、從來よりやや進んだ氣持で作つてゐた。今後もこの氣持で作り續け度いと思つて居る。

卷中「殘雪行」の旅の歌はただ行くさきざきでの卽興歌のみである。今少し靜かな一人旅をするつもりであつたのが、何處も初めての土地であつたため日夜初對面の人々との應接に心をとられてしまつてゐた。歌の出來なかつたのは、一つはそのためである。卽興は卽興のままその土地々々で詠

みすてた通りにしておいて改作しなかつた。

大正五年五月下旬　三浦半島にて　著者

秋より冬へ

千駄が崎

來馴れつる磯岩の蔭にしみじみと今日し坐れば秋の香ぞする

くれなゐの貝は寄らなく磯の藻の黑きばかりに秋更けにけり

蛍の秋

秋の濱かぎろひこもり浪のまにまに寄り合ふ
小石音斷(た)ぬかな

秋の日かげ濡れし小石に散り渡り寄せ引く浪
を見つつ悲しも

風の音身にこたへつつ砂山の蔭にかがみて秋
秋と言ひし

白砂に穴掘る小蟹ささ走り千鳥も走り秋の風
吹く

いつの間に離(さか)りは行きしあはれ吾(あ)子砂山の松
の根にし手招く

閑居

秋日さすまばら小松の丘越しに磯あらふ浪の
ひねもす聞ゆ

沖の岩

秋の大潮沖の瘦岩あらはれて光ればけうとわ
れも身寒く

沖の岩に水雷艇のはしり舟眞赤き旗をたてて
去りにけり

夕燒雲

沖邊より崎にたなびき秋かぜの夕燒雲となりにけるかな

夕燒の雲たなびける崎の山そのかげの海に魚とびやまず

濱に出でしに有明の月見えければ

ふるさとの秋の最中(なか)をふと思ふおもはぬ空の有明の月

ある朝

朝日子の匂ひてさすに落葉焚くけぶりもまじり窓あけて獨り

わが松に風は見えたれ入りつ海曇り晴れてな今朝はさびしる

芝山

芝山に登れば見ゆる秋の相模(さがみ)の霞み煙れるをちの富士が嶺

近山は紅葉さやかに遠つ山かすみかぎろひ相
模はろばろ

芝山の榊の蔭に風を避けゐつふと立ちたれば
見ゆる富士が嶺

いただきの風をし寒み秋の山卷葉櫟のかげを
やや下る

また或時に

もみぢ葉の照りは匂はねさやさやに秋浸みわ
たるここの芝山

來て見れば松ばかりなる片山に浸み照る秋日
麗らなるかも

夕照るや落葉つもれる峽の田の畔のほそみち
行けば鳴立つ

また或時に

靜心しづまりかねつ酒持ちて秋山さして出で
ゆくわれは

靜心ひとめをいとひ秋山の楢葉もみぢの根を
踏み登る

妻にさへものいふ惜しみ靜心たもちこらへて
秋山に來し

酒煮ると枯枝ひろふに落葉鳴る落葉鳴りそね
山は恐し

獨りなれば躬ながらわれの尊くて居つたちつ
酒を焚きたぎらかす

楢山の下葉もみぢにときをりに風渡りつつ酒
煮え來る

額に觸るる楢葉のもみぢ摘み取りつ唇にふく
みていふ言葉無し

酒飲めばこころは晴れつたちまちにかなしみ
來り畏みて飲む

曼珠沙華

風に靡く徑の狹さよ曼珠沙華踏みわけ行けば
海は煙れり

砂山を吹き越す風を恐しみ眼伏せて行けば燃
ゆ曼珠沙華

砂山のばらばら松の下くさに燃え散らばりし
こは曼珠沙華

眼鏡かけし何か言ひかけ見かへりし曼珠沙華
の徑の痩せほけし友

鰯煮る大釜の火に曼珠沙華あふり搖られつ晝
の浪聞ゆ

一心に釜に焚き入る漁師の兒あたりをちこち
に曼珠沙華折れし

枇杷の花

貧しさを嘆くこころも年年に移らふものか枇
杷咲きにけり

靜まらぬこころ寂しも枇杷の花咲き籠りたる
園の眞晝に

晩酌

しとしとに闇はも迫れ戸はささで居るもなか
なか可懷し飲まむ

木槿

濱街道住むとしもなき假住の籬根の木槿盛り
永きかも

籬越しに街道を行く人馬車見居つつさびしむ
らさき木槿

たまたまに出でて歩けば此處の家彼處の籬根
木槿ならぬなき

魚買ふと寄りし藁屋の軒深く魚の匂ひて木槿
窓越しに

さびしきは紫木槿はなびらに夏日の匂ひ消え
がてにして

この濱の不漁の續くや風よけの窓邊の木槿む
らさきぞ濃き

南吹き西吹きて浪の遠音さへ日ごとに變り木
槿咲き盛る

ところがらならぬ玻璃戸に風ぞ吹く木槿に晴
れし日の續きつつ

砂ほこり吹きまきし風の夕凪に玻璃戸は重し
木槿照り映え

降り立ちて砂ぼこりせる花木槿しみじみ見つ
つわれは疲れたり、

枕もたげ靜かに聞けば落葉積む曉の家に風は
落ちたれ

よべ深く睡りにければ心澄み頭(かしら)かろらかに朝
風聞ゆ

朝床に永く籠らじくさぐさの醜(しこ)の物もひ群る
は其處

東明(しのめ)の星のかがやき仰ぎつつけふは樂しと勇
みけるかも

朝井戸に水掬むとふと立ちたれば昨夜(よべ)の落葉
の香ぞ罩め居たる

暫くは齒を磨きつつ立ちつくす井戸邊埋めし
曉落葉

起きて今朝井戸にい行けば井戸圍む眞冬椿に
花見ゆあはれ

顏洗ふと昨夜吹き散りし井戸の落葉細くかき
わけ水くみ上ぐる

苦清水湧きつつ溜る細井戸の水濁らせじこの
朝靜に

朝なれやわが浴ぶる水日に光り狹き井戸邊の
冬木を濡らす

現身の鋭心萌すしばらくの朝の井戸邊の裸身
あはれ

この朝け先づ第一に相見たる井戸邊の妹美し
きかなや

わが行けば匂ひ煙りて冬日搖れ朝は心のかな
しきかなや

朝は瞳もしみじみとしてものを見れ落葉の蔭
の霜どけ眞土

この朝け煙草のからき煙さへむなしくはせじ
と深く吸ふかも

冬の日のあはれ今日こそ安からめ土を染めつ
つ朝照り來る

窓開き飯食ひ居ればはつ冬の朝日さし來ぬ樂
しかれ今日

ある時

着換すと吾子を裸體に朝床に立たせてしばし
撫で讃ふるも

蜜柑畑

土荒き蜜柑畑の朝時雨鋤きすててひとは在らざりにけり（その一）

山際より蒼み晴れゆく朝しぐれ斜めに海に入る蜜柑山

蜜柑山下枝くぐれば思はぬに麓遠々し白き海見ゆ（その二）

人聲を探して行けば蜜柑山ひともとの木に群れて摘み居し

投ぐるほどに見る見る籠に滿ちし蜜柑眞白き錢と代へて提げ持つ

蜜柑畑いまは重しと籠を置きあたり見かへれば枝垂るる蜜柑

蜜柑畑盡くれば山は楢山の黄葉照りつつ峰遠きかも

庭の蜜柑

わが園の隅に輝くひともと蜜柑朝な朝なに立ち出でて摘む

冬霞む

なにごとぞ霞かき垂れ眞冬日の安房が崎見え
ず海とろみ流る（十二月八日）

砂山に寢（いぬ）るおちゐず冬の日の霞めるなぎさ行
けど落ち居ず

朝凪の冬のなぎさに鵠鴒（いしたたき）啼き集（つど）ひゐて薄霞せ
り（同じく、十二日）

眞冬空鋸山にかすみ罩め峰（を）の上（へ）さびしも晝の
月懸る（同じく、十三日）

ひさかたの冬日眞白く澄み照れり入江細海霞
晴れなくに

白濱や居ればいよいよ海とろみ冬日かぎろひ
遠霞立つ

今朝とりわけていただきの白く見ゆ

岩が根の峰白みかも冬深み鋸山に雪降れるか
も

夕照

寒き空より漏れ來し午後の日の光よろこび居
れば百舌（もず）鳥とほく啼く

沖晴れて今か安房山さやに見えむ夕籠り居れば日ぞさし來る

うす赤み夕日なぎさに流れゐつうらさびしきに舟着きにけり

○

滿潮のいまか極みに來にけらし千鳥とび去りて浪ただに立つ

滿潮の邊波眞白く沖津邊はいよいよ青み足りどよもせり

夕潮さし沖邊ゆたけくなるままに啼きつつ走るむらなぎさ鳥

望ちかき夜にかもあらめ時雨降り籠りて聞けば浪の豐けさ

椿咲く

椿咲くと驚き悲しみ過ぎ經たるわがひと年ぞ顧みらるる

わが家にまた椿はな咲くくれなゐに散りにしは昨日いま咲き出づる

くろぐろと黒み靜まれる葉つばきの蔭に燃えたる初花椿

椿散る時に來りつ椿咲く今日まで住みぬ浪の近きに

つと落ちて百舌鳥は椿のかげに啼く曇れる朝の紅寒椿

天地の曇りくぐもり寒き時落葉のかげに咲き出づる椿

同顧半年

木槿咲き曼珠沙華咲きし白浪のこの海人が村に秋を越えにけり

しかすがに靜けかりけり顧みる曼珠沙華のはな白木槿花

埃立つ濱街道の往くさ來さこの秋は見し白木槿花

その時に見し誰彼の明らけし白木槿花咲きし思へば

をりをりに立ちどまりたるわが影の寒きも目路に浮び來るなれ

風

風吹けば吾子が頰ぞ染む茜さしこころ昂るか
吾子が頰ぞ染む（その二）
風を忌み深く籠れど埃づくあはれ机の椿の花
さへ
夕づけど風吹きやまず木蔭の井戸に顔洗ひ居
ればその木どよめく
西風立つときほひ亂れて相模なる三崎の沖に
帆ぞ靡きたる（その二）

椿

海風に梢なびける砂山のむらだち椿靡きてい
ま咲く
立ちつくすわがあたり坂の砂もこぼれずくれ
なゐ椿枝垂れてぞ咲く

或る日

酒飲めと冬日はるばる送られし鴨の羽色のこ
の深みどり

いと遠き風もまじりつ戸外なる落葉聞えてわ
が酒ぞ煮ゆ
下野の言すくなる友を思ひそが贈物鴨をわ
が煮る
妻子等を寢靜まらせつ殘りゐて夜のくだちゆ
くに煮る眞白酒

海邊の冬

おほよそに見し海岸の芝山の冬近づくと黄葉
しにけり

濱に續く茅萱が原の冬枯に小松まじらふわが
遊ぶところ
白濱の風を寒しみひそひそと入れば松原かぎ
ろひ居たり

朝

朝朝の眼ざめしばしの物おもひ苦しきにわれ
は衰ふるらむ
軒近き砂山松の梢染めて今朝も晴るるか冬日
さし來る

浪

浪見むと急げる行手暫くの朝日の空に塵もまはなく

朝な朝な浪の前に來てこころ踊る日にけに浪は新しきかな

下燃えに燃えあがるこころ止めかね朝の白濱とゆきかく行く

裏山の溪

わが心さびしき時しいつはなく出でて見に來るうづみ葉の溪（その一）

わが行けば落葉鳴り立ち細溪を見むと急げるこころ騷ぐも

溪ぞひに獨り歩きて黄葉見つ薄暗き家にまたも歸るか

冬晴の芝山を越えその蔭に魚釣ると來れば落葉散り堰けり（その二）

芝山のあひの細溪落葉つもりいよよほそまり釣るよしもなき

釣竿を片寄せて聞けば細溪の落葉をくぐる彼の瀨此處の瀨

こころ斯く靜まりかねつ何しかも冬溪の魚をよう釣るものぞ

細溪の魚はえ釣らず這ひあがるこの芝山の黄葉繁きかも

此處にして聞けば麓のせせらぎのなかなか高し黄葉照り籠る

瀨の音のとよめるなべに片山の黄葉いよいよ明らけきかも

曇り日

曇り日の夕立ちし風井戸の邊に落葉新しく匂ひ籠めたれ

曇り日のいよいよ曇り夕かけて風も動きぬ今は戸閉さめ

散歩

夕ぐれのよりどころなさにわれとなく家出でて來し此處の芝山

榛の木に楢の木つづく山際の刈田の畔ぞわが
行くところ

冬の海

冬近み入江の海の凪ぎ細り荒磯芝山黄葉しに
けり

眞冬日のひかり乏しき入海に漕ぎ出づる舟の
かぎり知らずも

大潮の干潮の冬日したたかに沖の黒岩あらは
れにけり

向つ國安房の山邊の夕影にひとむら黒き釣舟
の數

遠つ海水際赤らみ夕がすみたなびけるかたに
安房浮びたり

こごしき安房の岬に殘りたる夕日あきらかに
冬の浪立つ

横濱に入り來る船か煙あげ入日の崎を廻り浪
見ゆ

春淺し

芹つみ

芹つみに妹のさそふに誘はれてせんかたもなき野に出でにけり

汝は芹つめわれは野蒜を摘ましとむきむきにしてあさる枯原

斯くて早や春は立つにかをちかたの峰の上かすみて芹つむ我は

春淺きだんだら小田の畔の木のゆらぎ光りて芹つむわれは

芹生ふる畔の枯草にかいかがみ春立つといふを悲しむこころ

梅咲く

よもすがら東南風吹きしきし朝凪に家出でてみれば梅咲き靡く（その一）

東南風吹き沖もとどろと鳴りし一夜に咲き傾きし白梅の花

かとばかり咲き傾きし梅の花驚き見つつここ
ろ淋しき

わが庭に咲きしばかりかこの朝け出でて歩け
ば梅到るところ

年ごとに覺え來なれしさびしさの梅咲く頃と
なりにけるかな（その二）

梅の花はつはつ咲けるきさらぎはものぞおち
ゐぬわれのこころに

鰯寄る

海も狹に鰯來ると浦あげてとよめる蔭に梅咲
き盛る（その二）

青鰯浦ちかく來てとびちがふ朝凪の日の梅の
花さびし

海面の黒み騷だち鰯寄る入江の春の晝の月か
げ

鰯寄る細江のそらのうちけぶり鳶の群れゐて
啼けば悲しき

崎の端けふはここだく赤錆びて入江は凪ぎぬ
鰯寄るとふ

砂乾き船もかわきて待ちこらへし鰯は沖に見ゆといはずや（その二）

はしけやし鰯の網にかかりたる大鯖の腹のこの青鰯

鯖の奴の白腹さけばいま喰ひし鰯かたまりて飛び出しにけり

妹

ひつそりと物に縫ひ入りし妹のかたへに居りて静心なき

針とめてよろこび鴉いま過ぐと眼をつむりたる美し妹

病妻を伴ひ春浅き山に遊ぶ

麓より風吹きおこり椿山椿つらつら輝き照るも

椿山松もまじらひ朝風の聲のさびしも松葉散り來る

風を寒みはやく行かんと椿山いそげるかたに花搖れ光る

風立ちて木の間明るき散松葉落椿さへをちこちに見ゆ

疲れしと嘆かふ妻の背に額にくれなゐ椿ゆれ光りつつ

遠松のこずゑに風は見ゆれども此處は日うら妻よ息はな

青樫の蔭の枯草いざ妻よ晝食のむしろ此處に作らむ

枯萱のかげに見出でし稚梅の三つふたつ花をつけてゐしかな

松風のこゑのさびしさ見はるかす伊豆の遠海時雨行く見ゆ

銘酒白雪を送らむといふたより來る

津の國の伊丹の里ゆはるばると白雪來るその酒來る

眞酒こは御そらに散らふしら雪のかなしき名負ひ白雪來る

酒の名のあまたはあれど今はこはこの白雪にます酒はなし

白雪と聞けばかなしも早もかもその白雪を手に取らましを

手に取らば消なむしら雪はしけやしこの白雪はわがこころ焼く

白雪は白雪はとて待つ苦しその白雪はいまだにかあらむ

をりからや梅の花さへ咲き垂れて白雪を待へその白雪を

春浅し

わが庭の竹の林の浅けれど降る雨見れば春は來にけり

鶯はいまだ來啼かずわが背戸邊椿茂りて花咲き籠る

山やき

いづかたの山焼くるにかきさらぎの冷たき空に煙なびけり

衣黒きふるさと人ら群りてかの山邊をもけふは焼くらむ

梅

朝な朝な立ち出でて見る白梅の老木の花の盛り永きかも

並み立てる椎の梢に風見えて白梅のはないよよ白きかも

梅の花濱浪近み砂風の間なくし吹きて咲くがわびしき

梅の花さかり久しみ下褪せつ雪降り積まばかなしかるらむ

しがすがに梅の花いまは褪せそめぬ昨日も今日も空は晴れつつ

梅の花褪する傷みてしら雪の降れよと待つに雨降りにけり

梅の花褪せつつ咲きてきさらぎはゆめのごとくになか過ぎにけり

來福寺にて

友の僧いまだ若けれしみじみと梅の老木をいたはるあはれ

酒出でつ庭いちめんの白梅に夕日こもれるを
りからなれや

薄雪

常のごとただに汐風吹きしくと嘆きは起きし
雪の降りつつ
椎椿吹き撓む風になかそらになから消えつつ
薄雪の降る
藍深く海はよどみつ向ふ崎安房の國邊に雪晴
れにけり

朝寒し

寒む寒むとあかつき起きに見やりたる背戸の
笹山春雨の降る
椿の木ゆらぎ光りてうす雲の朝風の空に日は
懸りたり

肥料船來る

下肥料を賣る帆前船寄りにけりこの海人が村
に雪は降りつつ

肥料船の來しとおらびて海人どもの錢かぞへ
つつ肥料買ふあはれ

砂畑に麥は芽ぐみつ畏みてその瘦麥に肥料や
る海人は

沖にのみ漁るならず砂畑にけふ海人が子は糞
肥料をまく

畔の草

曇り日のこころいぶせみうち出でて來しは山
田の枯草の畔

枯草の山田の畔のなにかなくなつかしくして
行きとどまらず

春淺み土は鋤かれず山はざま細田だんだんに
たたなはるかも

前の山のまろみうれしく眺め入る山田のくろ
の枯草深し

沈丁花

めづらしく白雪降るとかしこみて部屋にこも
れば匂ふ沈丁花

沈丁花いまだは咲かね葉がくれのくれなゐ蕾
匂ひこぼるる

或日

みちのくの雪見に行くと燃え上るこころ消し
つつ銭つくるわれは
貧しければこころ怯れつひさかたの天の照る
にもかき曇るにも

若布とり

はつはつに生ふる若布に潜き寄るきさらぎの
海の海人少女たち
天つ日をよこぎる雲のうつりつつ眞青き浪に
海女群れゐたり
はたはたと倒るる浪の前にうしろに海女が黒
髪縒れなびきつつ
海人少女群れたる崎の白浪に鵜はひたひたに
まひ過ぎにけり
四方の海霞みこめつつわが崎の浪水沫立ち潜
ける少女

殘　葩

雪もよひ黑雲くづれ夕燒けつ庭の白梅褪せ褪せて咲く

霜とけて雫ながるる葉がくれにくれなゐ椿なほ散り殘る

菜の花

ひとかたまり菜の花咲けり春の日のひかり隈なき砂畑の隅にくろぐろと棕梠の影させり菜の花のかたまりて咲く傍らの砂に

春早くまよひ出でたる蜂の子の菜の花のうへをなきめぐるあはれ

三崎港へ

向つ崎眞赤き崖に吹きつくる風の寒きに船傾きぬ

岩とびとび鵜の大群の浮き沈む潮騷にして船傾きぬ

三崎港

大島の山のけむりのいちじろく立つよと見れば暮るるなりけり

相模の海月夜浪立ち片寄りの黑雲のかげに伊豆の山燃ゆ

伊豆人はけふぞ山燒く十六夜の月夜の風にその火靡けり

殘雪行

三月十五日朝、仙臺驛にて

停車場の柱時計を仰ぎつつ現なや朝のストーヴの椅子に

朝づく日停車場前の露店にうららに射せば林檎買ふなり

鹽釜より松島灣へ出づ

鹽釜の入江の氷はりはりと裂きて出づれば松島の見ゆ

同日夜盛岡着

盛岡の街か灯ぞ見ゆわが汽車の窓に楊の搖れては消ゆる

盛岡驛に野菊君等と逢ふ

人ごみのなかに見出でし友が顏笑みかたまけてありにけるかな

相逢へば昔ながらの言すくな菊池野菊は齡もとらずけり

盛岡古城趾にて

樅檜五葉松はた老槇の並びて春の立つといふなり

啄木鳥の眞赤き頭ひつそりと冬木櫻に木つつきぬたり

啄木鳥ぞ來てとまりたる槇の蔭の落葉櫻の眞白き幹に

ほのぼのと燃ゆる思ひにせんすべの盡きて眺むる梢なりけり

雫石川か中津川か

城あとの古石垣にゐもたれて聞くとしもなき瀬の遠音(とほね)かな

雪やめば四方の山見ゆ

遠山に消えつつ殘るはだら雪雨のごときを見る眞晝かな

宿酔か旅の疲れか

朝まだき日はさしながら降る雪を軒に眺めて疲れてゐたり

大吹雪の野邊地驛に草明君出で迎ふ

われ待つと荒野野邊地の停車場の吹雪(ふぶき)のかげに立ちし友はも

野邊地出づれば海見ゆ

大吹雪汽車の小窓のかき曇り雫垂れつつ海見
え來る

青森驛着、舊知未見の人々出で迎ふ

やと握るその手この手のいづれみな大きから
ぬなき青森人よ

宿望かなひて雪中の青森市を見る

いつか見むいつか來むとてこがれ來しその青
森は雪に埋れ居つ

鈴鳴らす橇にか乘らむいないな先づこの白雪
を踏みてか行かむ

雪高く往き交ふ人の輝きていま青森に夕日さ
すなり

明けぬとて酒、暮れぬとてまた

酒戰たれか負けむとみちのくの大男どもい群
れどよもす

たくたくと大酒樽のひもすがら斷えず吹雪き
て夜となりしかな

青森より大釋迦驛へ

古汽車の中のストーヴ赤々と燃え立つなべに
大吹雪する

大釋迦より騎馬し北津輕へ入る

雪いよよ峽も深みてわが馬の鬣黑く歩まざる
なり

わが行く手晴るるとすれば岩木山また吹雪き
來て馬嘶かず

これより訪ねむとする友は聞えし沈默の人
なり

もの言はぬ加藤東籬を見ばやとてはるばる急
ぐ雪路なるかも

五所川原町一泊

ひつそりと馬乘り入るる津輕野の五所川原町
は雪小止みせり

津輕平野一面積雪數尺に及ぶ

橇の鈴戸の面に聞ゆ旅なれや津輕の國の春の
あけぼの

雪の上に橇數多行き交ふは己が田と目ざす
邊に肥料を運び置くなりとか

畫かけて雨とかはれる白雪の原のをちこち肥
料運ぶ見ゆ

雪深けれど既に春なればその表氷りたり、土
地の人これを堅雪と呼ぶ

堅雪の畦道ゆけば津輕野の名殘の雁か遠空に
見ゆ

東籬君宅にて初めて蟇を聞く

白雪の何處にひそみほろほろと鳴き出づる蟇
か津輕野の春

津輕なる松島村は友東籬山蘭君等が故郷なり

歸る雁とほ空ひくく渡る見ゆ松島村は家まば
らかに

南津輕板留溫泉雜詠

雪消水岸に溢れてする霞む淺瀬石川の鱒とり
の群

むら山の峽より見ゆる白妙の岩木が峯に霞た
なびく

片栗といへる草ありて雪の蔭に萌ゆ

かたくりの若芽摘まむとはだら雪片岡野邊に
けふ兒等ぞ見ゆ

家を出でて既に七旬

歸らむといそぐここころのしかすがに動くとは
すれ寂しきものを

南津輕黑石町

黑石の町の坂みち登りつつ春は深しといひに
けるかも

秋田市千秋公園

鶸繡眼兒燕山雀啼きしきり櫻はいまだ開かざ
るなり

曇さびしいま七日たたば咲かむとふ櫻木立の
蔭を行き行くに

秋田美人

名に高き秋田美人ぞこれ見よと居ならぶ見れ
ば由々しかりけり

岩代瀬上町より飯坂溫泉へ

花ぐもり晝は闌(た)けたれ道芝につゆの殘りて飯(いひ)
坂(さか)とほし

たわたわに落つる春田のあまり水道邊に續き
飯坂とほし

行き行けば榮の花ばたけ蝶蝶の數もまさりて
飯坂とほし

友ふたりたけぞ高けれだんまりの杖をうちふ
り飯坂とほし

榮ばたけのすゑの低山やますそにそれとは見
ゆれ飯坂とほし

飯坂溫泉雜詠

川ごしに杉は明るく並び立ちたまたまにして
鶯啼くも

津輕にて田打櫻と聞きし花いまぞ咲きたれ岩代辛夷

とつとつと早瀨流れて咲き垂れし田打櫻は花雪の如し

君が背に辛夷白花咲き枝垂れその花を背に君はまだ醉はず

酒興いよ〳〵到る

夕かけて雲は山邊に流れ來ぬ櫻はいまだ散るといはなくに

某妓磯節を唄ひ某妓秋田節をよくす

磯節をきけばかなしも陸奥の山の奥の唄をきけば悲しも

福島市某旗亭卽興

つばくらめちちと飛び交ひ阿武隈の岸の桃の花いま盛りなり

夕日さし阿武隈河のかはなみのさやかに立ち
て花散り流る

白梅集

卷首に

「過ぎゆく時」それを靜かに見まもつてゐる場合と、時そのもののなかに自分自身をぶち込んで、若しくは卷き込まれて、よれつもつれつしてゆく場合とが私にはある。歌にも自然この二つの場合が出て來る。本集に收めた歌は總じて後者の場合に出來たものが多いやうである。そして、ともすれば絶望的な、自暴自棄的な、とり亂した心のひびきが隨所に見えて居ることが自分自身にもよく感ぜられて誠に苦しい心地である。

年齢境遇の關係があるかも知れない。また漸次に歌を作り進んでゆく上から、是非經ねばならぬ一の道程であつたかも知れぬ。兎に角、從來のわが歌風に無かつた斯の傾向を自らいま嫌惡と驚きの眼を以て私は見て居るのである。

而して、心よりなつかしく本集を顧る日の一日も速く來らむことを祈つて居るものである。

於小石川金富町寓居

大正六年晩春　　牧水生

夏の歌

椋の葉の風

朝床の枕のうへにながれ入る椋の葉の風雨よぶらしも

けふもまた明けにけるかな軒端なる椋の青葉に風は見えつつ

椋の葉の風は流れて朝床のわが眼わが手の萎(しな)えしに吹く

朝起きの萎えごころか椋の葉にうごける風を
見ればいとはし

さわさわに朝風吹けば深みどり椋はそびえて
大空曇る

ある朝

夏草のなびける山に眞向ひて今朝をさびしく
歩み居るかも

砂みちの砂のほこりの今朝立たずゆく手にほ
そき苗代田見ゆ

浪の音今朝は凪ぎたれ坂みちの木がくれにし
て聞けば凪ぎたれ

麻の葉

麻の葉の茂りさびしも砂畑のくろの細みちゆ
けば袖濡る

麻にいつ花咲くものぞ茂り葉の青きがままの
夏のしののめ

ある朝

しぶしぶと顔洗ひをれば眞青に梅雨の朝日の
落ちて來にけり

梅雨雲の垂れに垂れつつひさかたの空の隅より朝日子させり

自嘲

妻子らを怖れつつおもふみづからのみすぼらしさは目も向けられず

犬に追はるる猫といへどもわがごとき醜きなりはえはなさざらむ

われと身を思ひ卑しむ眼のまへに吾子こころなう遊びほけたり

砂濱の濱ひるがほのしよんぼりと咲けるこころか涙ながるる

めづらしく妻をいとしく子をいとしくおもはるる日の晝顔の花

友

相逢ひて顔みてをればなにほどかこころ安まるこの友とわれ

慰むる慰めらるる新しき言葉もあらねうれしきぞ友

さびしげにほほゑめる汝をいつもいつも思ひいだきてこひしきぞ友

山百合

夏草の茂みが上に伸びいでてゆたかになびく山百合の花

夏山の風のさびしさ百合の花さがしてのぼる前にうしろに

折りとればわれより高き山百合の青葉がくれの大白蕾

たわたわに蕾ばかりが垂れゐつつこの山百合の長し眞青し

山百合の花のひとたばさげ持ちて都へのぼる友に逢はむため

ある庭

鳳仙花しらじら咲きて細庭の夏もさかりとならむとすらむ

柿の木のおほき根もとに虎耳草木賊しげりて
梅雨明けにけり

白き蝶そらのかたよりふわふわと木賊の莖に
きてとまりたる

古池

青苔の地にしみ入る樫の葉の影のゆれゐてわ
が歩む二人

古池のみぎはの草にみそはぎのほそぼそ咲き
てわが歩む二人

古池のひるのかがやきなかなかにうとましく
してわが歩む二人

古池のめぐりにおふる八重葎分けて歩めば日
の光さびし

ゆるびたる手足の筋に八重葎しみて痛むとね
ころびてをり

うつつなく眺めてをれば古池の藻草のかげを
ゆける魚の子

眼の前の夏のひかりのさびしさよ古池をゆく
魚の子の群

ふと仰ぐみそらの雲に眞ひるの日てりよどみ
ゐて古池さびし

眼にうつるもののわびしく見入らるるけふの
日なれや古池ひかる

蘭といふもさびしき草ぞうつつなうわがをる
今日の眼の前にして

ある夕

いと遠き人の世に啼く蜩のこゑかも雨とすみ
て聞ゆる

東京より相模なる妻の許に

ほがらかに晴れゆく夏の朝空のいよよ深みて
ひとのこひしき

こころややに冴えゆけば夏の朝の空窓にかが
やきひとのこひしき

眞ひる空窓にかがやきわが腕に汗のながれて
ひとのこひしき

たちいでて見る庭さきの夏草の眞ひるしなえ
てひとのこひしき

晝の空ひかりのなかにまふ塵の見ゆとも見え
てひとのこひしき

をりからやゆきずりびとの聲さへも身にしみ
わたりひとのこひしき

ちりほこり光り煙れる晝の街ゆきかふ子らを
見つつこひしき

屑買のひそひそすぐる裏街の窓にこもりゐて
戀ふは苦しき

こひしさのいまはたへがたくかきさぐり小さ
き鏡をとりにけるかも

秋風と蓮の花

蓮ひらくしらじら明けに不忍の池にまひ降る
る白鷺のむれ

朝露の蓮みるひとの靜かなるつかれたる顏を
よしとおもへり

しののめの蓮見るむれにまじりたり白蓮より
も靜かなる少女

雨よべる風なるらしも朝空に雲のみだれて白
蓮さけり

黒々と雨に濡れつつ水鳥のかいつむり啼けり

蓮の花のかげに

暴風雨すぎし池はあふれて今朝の秋咲きいづ

る蓮のひともと紅ゐ

いまは早やこぼれむとするくれなゐの蓮の花

あはれくもり日のもとに

はちす葉の青みかわきて秋の風吹き立てる池

の白蓮の花

秋立つや池の水錆の片よりに白はちすのみ咲

きて風吹く

葉がくれにくれなゐの花ゆれゐつつ秋風しる

きはちす葉の池

あかあかと朝日さしゐて池の蓮みながら秋の

風ならぬなき

秋の歌

失題

つきつめてなにが悲しといふならず身のめぐりみなわれにふるるなとりにがすまじいものぞといつしんにつかまへてゐしこころなりけむある時は身體いつぱい眼となりてつまらなさをば見てゐる如し

つまらなさ手足にあふれふらふらとさまよひあるく身體なりけりぢつとしてひとみ落せば早や其處に來てちぢまれるつまらなさなるちからなき足をうごかしあゆまむとあせる甲斐なさいまはやめなむ何もかもおもひあぐめるはてに來て見ゆるひとといふひとみないぢらしきゆゑはなく今はたのしとおもひあがりつと立ちにしか眼こそくるめけ

何もかもつまらなく見ゆるこの日頃いかなる面(つら)をわれのせるらむ

新しき出來ごととふ聞(きき)よろしその出來ごとの近づくなゆめ

秋の風

秋の風吹きしきれどもよそにのみ見てちぢまれるこころなりけり

とりとめのなき日と今日も暮れにけり日にけに秋の風は吹きつつ

落葉のころ

わがすきの落葉のころとなりにけり身體(からだ)のつかれくやしけれども

こほろぎ

何草ぞこの草むらの硬さよと腰をおろせばこほろぎ啼けり

われと身の重みを地(つち)におぼえつつ草むらに見る秋の風かな

こほろぎのなきたつところそこにここに櫻の
落葉ちらばれるかな

耳は耳目は目からだがばらばらに離れて蟲を
きいてをるものか

ほのぼのとわが頰染まるかこほろぎの啼きし
きりたる草むらのかげに

夜の窓

夜の窓ひるのつかれのやはらかう浮び來る身
に倚ればたのしき

窓を開けよ風邪はひくともこのごろの夜空な
がめでねむらるるものか

だんだんにからだちぢまり大ぞらの星も窓よ
り降り來るごとし

このままに落ちむ底なき穴もあれいまをたの
しく睡らむとする

秋の雨

倦みはてしわが身つつみて降るものか濡れゆ
く屋根の秋雨の音

うつとりと雨をながむるこころかも疲れていまは何もおもはなくに

めづらしくこころ晴れつつながめ入るけふ秋雨のかなしくもあるか

冬晴

秋の樹木

樫の木と山毛欅の木立とさしかはす小枝小枝に秋深みたれ

樫の木の瑞枝の伸びのみづみづし山毛欅の紅葉に入りまじりたる

稀なれや今日のうらら日庭さきの眞冬篠竹ひ
かりてやまず

夜霧

ガラス戸に夜露垂る見ゆ下宿屋のそのガラス
戸の蔭に坐れば
冬の空ガラス戸越しに墨よりも深きをながめ
夜半居るはたのし

獨酌

おひおひに酒を止むべきからだともわれのな
りしか飲みつつおもふ
酒のめばなみだながるるならはしのそれもひ
とりの時に限れる
たいねんと靜もれる山もありがたししかおも
へども心は騷ぐ
知るひとのそれもこれもがみな可愛くなりゆ
く時ぞ涙ながるる
めいめいのこころそれぞれに向きてゆくこの
友どちをとどめかねつも